

大学生と両親の人生観にみられる時代的变化

大井 直子
岡林 秀樹
原 一雄

はしがき

国際基督教大学においては1961年より5年間、ロックフェラー財団より研究助成を受け、M. E. Troyer教授を中心に「大学生の価値観」研究班を組織し、一般教育プログラムの一環、すなわち、社会科学科必修科目（SSV 1+1+1単位）として全学の学生たちに人生観その他の社会的態度に関する調査を1年次、2年次、ならびに4年次に施行した。それらの回答を基にして個々の学生は自己の価値志向を洞察し、また、授業中の討議演習を通して他人との比較検討を行なった。

1980年代初頭および1990年代に入ってから度も、同種の調査研究が断続的且つ部分的ではあるが著者たちの手によって行われてきた。今回、これまでの共同研究の一部を紹介するに当たり、まず本稿では価値観の基本的構造を検討し、大学生とその両親の人生観にみられる時代的变化を比較考察する。

調査 I

目的

本調査は価値観の基本的構造を因子分析を用いて検討する。C. Morris

(1956a) は歴史上、思想的・宗教的に重要な影響を残した人物の生き方を吟味し、人生観が次の基本的3要素から成り立つことを明らかにした。すなわち、自分の欲望を思うままに充足させ、それに埋没する傾向の“ディオニソス要因”、世界を支配し、改造しようとする能動的傾向の“プロメテウス要因”、自分の欲望を規制することにより、自分自身を調整していこうとする傾向の“ブッダ要因”の3つで、これらを基に「13の生き方」質問紙を作成した。そして調査の結果から5因子を抽出し、それらと上記の基本的3要素との対応を論じた。それに対し、著者たちは Morris の質問紙（日本語版）を ICU の学生に施行し、その回答を同様に因子分析した結果、現代の学生の特徴を捉えやすい4次元構造を提案した（原・大井・岡林，1991）。

そこで本調査では価値観の基本的構造を検討するために、人生観・宗教倫理観・政治経済観など観念的価値観と称せられる価値志向を、下記の2つの仮説に基づいて考察することとする。

1. 人生観・宗教倫理観・政治経済観の3つには共通の因子構造が潜在する。
2. 人生観には、時代差や世代差を超えて共通の因子構造が潜在する。

方 法

被験者：本学において施行された価値観研究に参加した被験者の総数は表1に示す通りで、延べ4,000名を超えている。ただし、1960年代の被験者の内には、在学中に3回、さらに卒業後の追跡調査を加えて計4回、また、1990年代の被験者には入学直前とその後の計2回、それぞれ異なる時期に回答した同一被験者が相当数含まれるので、被験者の実数はこれら資料の総数を大きく下回る。

次に、人生観・宗教倫理観・政治経済観の3種の質問紙全てに回答したものの総数は1,922名である。これらの内、60年代の資料は Troyer, 藤田, 北山, 永野, および原 (1963) によって、また80年代の資料は岩崎, 石塚,

表1 「13の生き方」質問紙の実施年度および学年別の被験者数

大 学 生										
実施年度 (年)	60年代					80年代		90年代		
	1962	1963	1964	1965	1966	1983	1990	1991	1992	1993
学 1 年生	176	251	187	257	206	177	299	65	268	305
2 年生		166	233	171		56		92		
年 3 年生						61				
4 年生				153		64	59			
小計			1,800			358		1,092		
						3,258				

卒業生		両 親			
実施年度 (年)	1990	1962・63		1993	
		父	母	父	母
	94	137	153	212	241
小計	94	290		453	
総計		4,089			

原（1984）よって収集された調査資料の中から該当する部分を借用したものであり、90年代の資料は本稿の著者たちが収集したものである。

調査用紙：本研究の根幹をなす部分は人生観に関わる調査で、これにはC. Morris（1956b）が開発した「13の生き方」質問紙の日本語版（一部改正）を使用した。宗教倫理観および政治経済観については、旧「大学生の価値観」研究班が共同開発した「宗教倫理のみかた」と「政治経済のみかた」を使用した。

手続き：60年代の在學生には授業中に実施し、彼らの両親には学生を通して回答を依頼した。80年代の被験者にはメッセージボックスを通して質問紙を配布した。1990年度の1年生、60年代の卒業生、ならびに1993年度の1年生とその両親には郵送法で、また、90年代の残りの被験者にはメッセージボックスを通して質問紙への回答を依頼した。

結果と考察

「13の生き方」質問紙に回答した全被験者の評定得点について主成分分析を行った後、ヴァリマックス回転を施し、先行研究（原他，1991）と同様に4つの因子を抽出した。各項目毎に得られた因子負荷量は表2の通りである。高い因子負荷量（.40以上）の質問項目は、第Ⅰ因子には生き方（以下Lと略記）13（奉仕）・L3（慈愛）・L1（中庸）・L10（克己）・L4（享楽）、第Ⅱ因子にはL2（達観）・L11（瞑想）・L9（受容）、第Ⅲ因子にはL6（努力）・L12（行動）・L5（協同）、また、第Ⅳ因子にはL8（安楽）・L7（多彩）が含まれていた。第Ⅰ因子から第Ⅲ因子までは、Morris（1956b）の基本的3要素にほぼ対応していると考えられる。それ故、第Ⅰ因子は“ディオニソス要因”の裏返しである“慈愛奉仕型”、第Ⅱ因子は“ブッダ要因”と類似している“内面生活型”、第Ⅲ因子は“プロメテウス要因”と類似している“積極行動型”と名付けた。そして第Ⅳ因子は、現代の社会的傾向としてよく言われるところの、1つの生き方にこだわらず、状況に応じて柔軟に生き方を変え、安楽を好むという特徴を示しているところから、先行研究（原他，1991）と同様に“安楽多彩型”と名付けた。

仮説1に関しては、人生観・宗教倫理観・政治経済観の3種の質問紙に回答した被験者の評定得点を一括して主成分分析を行った後、ヴァリマックス回転を施し、表3に示す通り4つの因子を抽出した。「13の生き方」質問紙のみ（表2参照）と3種の質問紙を一括したもの（表3参照）から得られた因子構造を高因子負荷量（.30以上）を手がかりに比較した結果、両者の間

表2 「13の生き方」質問紙の因子構造 (N = 4,089)

項目	I	II	III	IV	共通性
L13 率仕	.72	-.02	.13	.03	.54
L 3 慈愛	.66	.10	-.01	-.02	.45
L 1 中庸	.55	.06	-.18	.29	.42
L10 克己	.52	.19	.12	-.24	.38
L 4 享楽	-.49	.41	.26	.20	.52
L 2 遠観	-.03	.73	-.05	-.10	.56
L11 瞑想	.17	.71	-.01	.05	.53
L 9 受容	.10	.59	-.06	.39	.51
L 6 努力	.11	-.01	.75	-.12	.60
L12 行動	-.18	.04	.71	.08	.54
L 5 協同	.38	-.27	.54	.14	.53
L 8 安楽	.05	.14	.00	.76	.60
L 7 多彩	-.07	-.12	.05	.70	.52
固有値	2.04	1.81	1.52	1.34	
寄与率(%)	15.7	13.9	11.7	10.3	
累積寄与率(%)	15.7	29.6	41.2	51.5	

に高い一致度が認められた。従って、宗教倫理観と政治経済観は、ともに人生観の基本構造に基づいて考察することが妥当であると考えられる。

仮説2に関しては、各年度ならびに時代毎に分けた被験者群にも同様の処理を別々に行い、上記4因子について高因子負荷量(.50以上)を示した項目を表4に列挙した。60年代の卒業生の追跡調査の資料からは第IV因子に含まれる項目(L7, L8)が見いだせなかったが、それ以外の被験者群に関しては、全被験者から抽出された4因子とほぼ同様の因子構造が認められたので、この4因子構造の安定性が一応確認されたと考えられる。それ故、全被験者から抽出された4因子構造を基にして算出した因子得点で論を進めることにしたい。

表3 人生観・宗教倫理観・政治経済観に共通する4因子の因子負荷量

項 目	I	II	III	IV	共通性
L13 奉仕	.57	.12	.01	.17	.379
L3 慈愛	.57	.09	.03	.09	.350
L4 享樂	-.37	.04	.33	.01	.258
R3 生活規範	.76	.02	.07	-.12	.603
R6 救済	.73	-.14	.13	-.18	.609
R7 無神	-.46	-.11	.12	.33	.366
R4 儒教	.33	.19	.29	.18	.277
L10 克己	.29	.10	.06	.15	.126
L7 多彩	-.07	.46	-.00	.04	.228
L1 中庸	.24	.38	.11	-.03	.224
L8 安樂	-.03	.35	.26	.00	.198
R5 折衷	-.01	.54	.03	.25	.363
R8 調和	.18	.51	.02	.03	.297
P4 合理	-.01	.45	-.01	-.07	.211
P6 自由	.05	.35	.12	-.05	.150
P2 修正	.23	.30	-.07	.01	.154
L9 受容	-.02	.12	.55	-.11	.341
L2 遠視	-.07	.01	.50	-.16	.289
L11 冥想	.03	-.05	.46	-.05	.223
R9 他力本願	.16	-.12	.36	.10	.185
R1 自力本願	-.03	.20	.33	.25	.222
R2 神道	.02	.16	.31	.24	.183
P1 愛国主義	.05	.06	.25	.14	.091
L6 努力	-.05	-.03	-.00	.48	.242
L5 協同	.19	.04	-.10	.47	.273
L12 行動	-.16	.01	.06	.32	.136
P3 共産主義	-.11	-.39	.19	.41	.378
P5 社会主義	.13	.00	-.05	.26	.090
固有値	2.884	1.920	1.412	1.242	
寄与率(%)	10.3	6.9	5.0	4.4	
累積寄与率(%)	10.3	17.2	22.2	26.6	

表4 各被験者群において高因子負荷量 (>. 50) を示した項目

被験者グループ (人数)		第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子
1962年	1年生 (N= 176)	3, 13, 4(-) 7(-)	2, 9, 11	5, 6, 12	8 1
1963年	1年生 (N= 251)	3, 10, 13, 4(-)	2, 9, 11	6, 12	7, 8 1
1963年	2年生 (N= 166)	3, 10, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8 1
1964年	1年生 (N= 187)	3, 13	2, 9, 11	6, 12	7, 8 1
1964年	2年生 (N= 233)	3, 10, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8
1965年	1年生 (N= 257)	3, 10, 13	2, 9, 11 4	6, 12	7, 8
1965年	2年生 (N= 171)	3, 13, 4(-)	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8 1
1965年	4年生 (N= 153)	3, 10, 13	2, 9, 11 4	5, 6, 12	7 1
1966年	1年生 (N= 206)	3, 13	2, 9, 11 5(-)	6, 12 1(-)	8 4
60年代	全体 (N=1800)	3, 10, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8 1
1983年	1年生 (N= 177)	3, 13, 4(-)	2, 9, 11 10	5, 6, 12	7, 8 9
1983年	2年生 (N= 56)	3 13 5, 7	9, 11 4	12 1(-)	8(-) 10
1983年	3年生 (N= 61)	3, 13	2, 9, 11	6, 12 7	5, 10, 4(-)
1983年	4年生 (N= 64)	3, 13, 4(-) 7(-)	2, 9, 11 10	6, 12	8 1, 5
80年代	全体 (N= 358)	3, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8
1990年	1年生 (N= 299)	1, 3, 13	8, 2, 9, 11	6, 12 10	4, 12
1990年	4年生 (N= 59)	13	5, 6 2, 11 1, 10	6, 4, 9	7, 8
1991年	1年生 (N= 65)	1, 3, 13	7, 2, 9, 11 4	5, 6, 10	7, 8 12
1991年	2年生 (N= 92)	1, 3, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8 10(-)
1992年	1年生 (N= 268)	3, 10, 13	2, 11	6, 12 7	8 9
1993年	1年生 (N= 305)	1, 3, 13, 4(-)	2, 9, 11	6, 12	7, 8
90年代	全体 (N=1,092)	1, 3, 13	2, 9, 11	6, 12	7, 8
大学生	全体 (N=3,253)	1, 3, 10, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8
60年代	卒業生 (N= 90)	3, 10, 13, 4(-)	9, 11 8	5, 6	1, 12(-)
1982, 83年	父 (N= 137)	1, 10	2, 9, 11 4, 8	5, 6 3	7(-) 12, 13
	母 (N= 153)	1, 3, 10	2, 9, 11 4	5, 6, 12	7, 8
	両親 (N= 290)	3, 10	2, 9, 11 4	5, 6, 12	7, 8
1993年	父 (N= 212)	1, 3	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8
	母 (N= 241)	1, 3 2	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8 13(-)
	両親 (N= 453)	1, 3	9, 11	5, 6, 12	7, 8
両親	全体 (N= 743)	1, 3	2, 9, 11	5, 6, 12	8 4, 10(-), 13(-)
全被験者	(N=4,089)	1, 3, 10, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8

調査Ⅱ

この調査は価値観の時代的变化と世代間の相違を検討するものである。世界的な政治・経済・社会・文化的変動の中で、社会的“規範”や“価値”は急激な変化を遂げている。青年期の重要な発達課題の1つとして、行動の指針としての価値観や倫理体系の獲得が指摘されてきた（Havighust, 1958）が、“規範”や“価値”をどのように認知しているのか、すなわち“価値観”の研究は、今日の大学生を理解するための基礎と思われる。また、それらと彼らにとって最も身近な“社会化のエージェント”である両親の価値観との比較分析は、親子関係の問題を考察する上に重要であるとともに、青年期と中年期それぞれの年齢層の価値観の特徴を明確化する上に基本的資料を提供すると思われる。

現代社会においては、親子の間に生き方や社会感覚などに大きなズレがあると言われている。中でも子供から見た母親に比べ、父親の評価が一般的に低いと言われているが、しかし、以前に比べると父親に対する好意的評価は増大し、親子間の情緒的結合が強化されつつあることを示す資料もある（NHK世論調査部, 1984）。また、青年期における親子関係の性差としては、女子は母親との接触や交渉が緊密なため、相互に傷つけ合うことも多いが、同時に信頼感や親密感も大きいと言われている（山田, 1988）。果たして人生観における親子間の比較において、どのような時代的様相や性差が現れるのだろうか。

本調査では、時代の推移と共に、大学生ならびにその両親たちの人生観がどのように変化したのかを、「13の生き方」質問紙の評定得点と因子得点の側面から比較考察することを目的とする。

方 法

被験者：1962・63年度の1年生（男子225名、女子202名）とその両親（父親137名、母親153名）、および1993年度の1年生（男子111名、女子194名）とその両親（父親212名、母親241名）である。

調査用紙：「13の生き方」質問紙（Morris, 1956b）の日本語版を用い、7件法の評定尺度による評定を行わせた。

手続き：62・63年度の学生の資料は一般教育科目の授業中に施行したものの、また、両親については学生を通じて回答を依頼し回収したものの記録を用い、93年度には学生と両親共に入学直前に質問紙を自宅へ郵送し調査への協力を求めた。

結果と考察

1. 評定得点による比較

1962・63年度および1993年度の男子学生、女子学生、父親、ならびに母親の平均評定得点を図1に示した。評定得点4が好ましきの中位点、4以上が高い評価、4未満が低い評価を表している。この図が示すように、全群において平均評定得点が中位点以上の生き方はL7（多彩）、L1（中庸）、L8（安楽）、L10（克己）であることから、これらの生き方は比較的好まれているものだと考えられる。一方、中位点未満の生き方はL11（瞑想）、L9（受容）、L2（達観）、L4（享楽）であった。

変化の要因を明らかにするため評定得点について時代と年齢と性による分散分析を行った結果、62・63年度より93年度の方が評価が高くなったものは、L7 ($F_{(1, 1467)}=148.58, p<.001$) と L8 ($F_{(1, 1467)}=23.40, p<.001$) と L12 ($F_{(1, 1467)}=32.78, p<.001$) であった。一方、93年度の方が評価が低くなったものは、L1 ($F_{(1, 1467)}=30.04, p<.001$)、L2 ($F_{(1, 1467)}=30.04, p<.001$)、L3 ($F_{(1, 1467)}=264.90, p<.001$)、L5 ($F_{(1, 1467)}=13.30, p<.001$)、L6

62・63年度

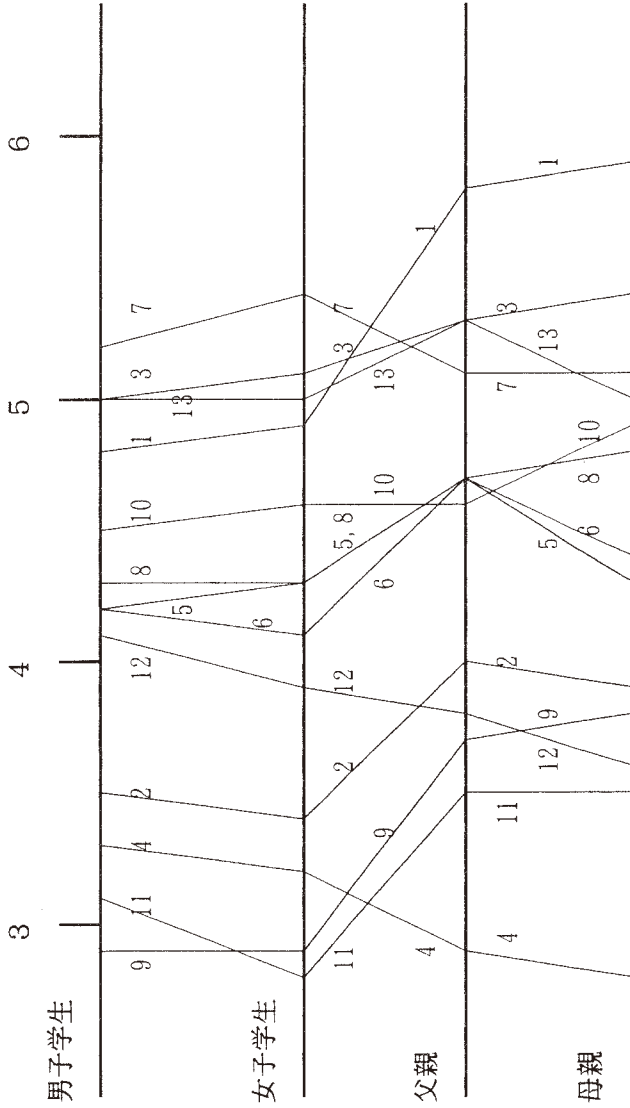


図1-1 62・63年度の男子学生、女子学生、父親、
ならびに母親の平均評定得点の関係

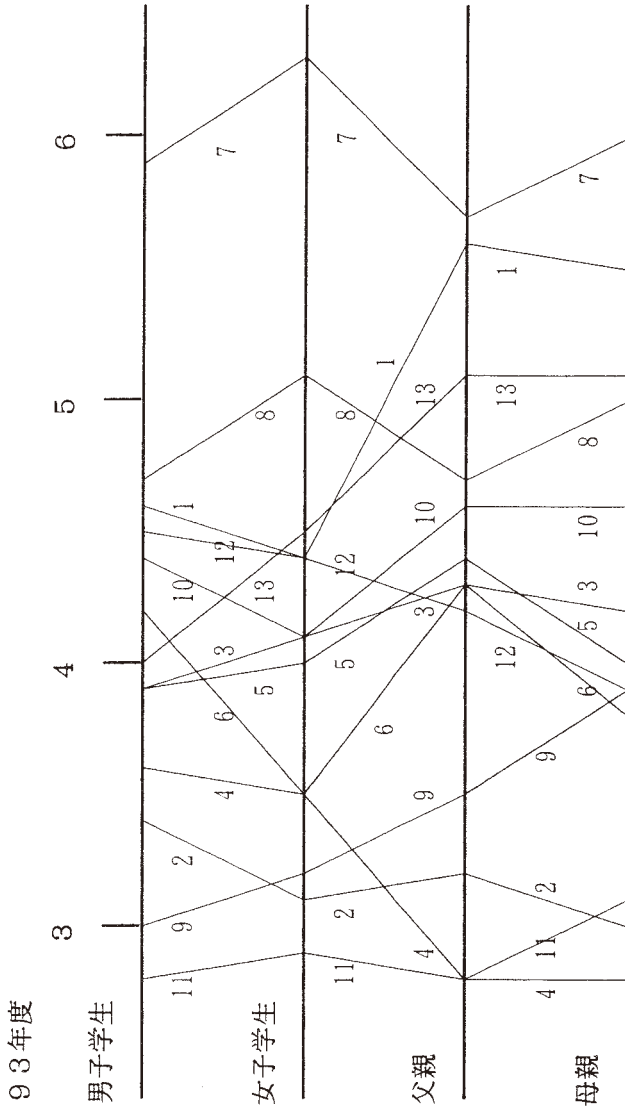


図1-2 93年度の男子学生、女子学生、父親、
ならびに母親の平均評定得点の関係

($F_{(1, 1467)}=44.95, p<.001$)、L10 ($F_{(1, 1467)}=13.09, p<.001$)、L11 ($F_{(1, 1467)}=21.18, p<.001$)、および L13 ($F_{(1, 1467)}=21.45, p<.001$) であった。特に、L7 に対する評価が著しく上昇し、L3 に対する評価が著しく下降している。目まぐるしく変動する社会に対応するため、学生も両親も時と場合に応じて多元主義的生き方を好み、他者への共感と自己抑制の生き方を嫌うようになったことが分かる。この現象は、Morris 他 (1971) のアメリカ合衆国の大学生に関する 1950 年と 1970 年の比較や安藤 (1978) の 1964 年と 1973 年の九州大学での比較、更に岩崎他 (1983) の ICU における 1963 年と 1983 年の比較と合致し、更に今回は増幅している。

また、学生より両親の評価が著しく高かったものは、L1 ($F_{(1, 1467)}=289.40, p<.001$) と L9 ($F_{(1, 1467)}=108.34, p<.001$) であった。一方、両親より学生の評価が著しく高かったものは、L4 ($F_{(1, 1467)}=60.55, p<.001$) であった。

時代と年齢に交互作用があったものは、L2、L4、L8、L11、L13 であった。そこで修正 LSD 法による下位検定を行ったところ、図 2 のように L2 は 62・63 年度に高かった両親が有意に低くなり ($p<.01$)、L4 は学生のみ 93 年度が有意に高く ($p<.05$)、L8 は、62・63 年度に低かった学生が有意に高くなった ($p<.01$)。更に、L11 は 62・63 年度に高かった両親が有意に低くなり ($p<.01$)、L13 は学生のみ 93 年度が有意に低かった ($p<.01$)。これらのことから 30 年前の両親は達観や瞑想を学生よりかなり高く評価していたが現在は学生と同じレベルになったことがわかる。また学生がより享乐的になり奉仕を嫌うようになったことが窺われる。更に、強烈な刺激を好まず、平穏で安楽な生活を求める生き方を、30 年前は青年期の学生は好んでいなかったが、現在の学生は、中年期の両親と同じように好むようになった。

また、男性の評価が高かった生き方は、L6 ($F_{(1, 1467)}=32.96, p<.001$) と L12 ($F_{(1, 1467)}=10.93, p<.001$) で、一方、女性の評価が高かった生き方は、L7 ($F_{(1, 1467)}=15.34, p<.001$) であった。男性が努力や行動を好み、女性が多彩を好む傾向は岩崎他 (1983) の学生の男女比較との結果と合致し

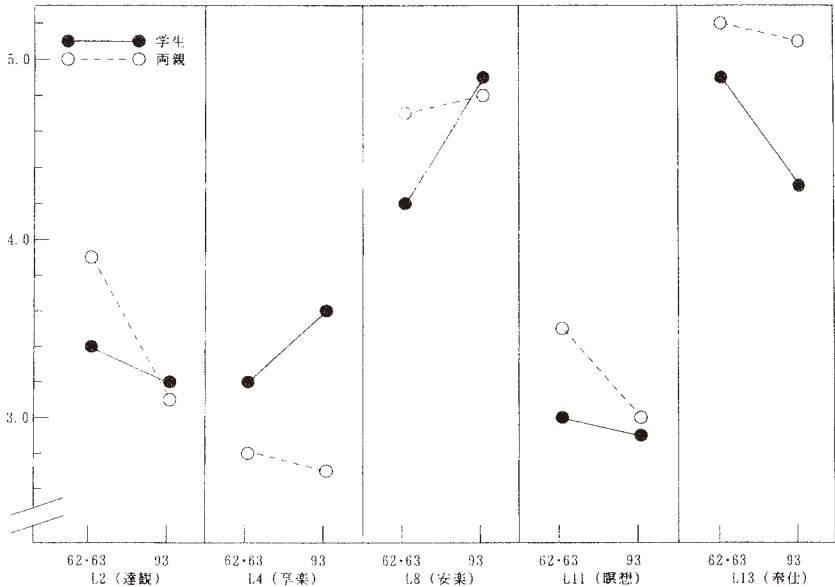


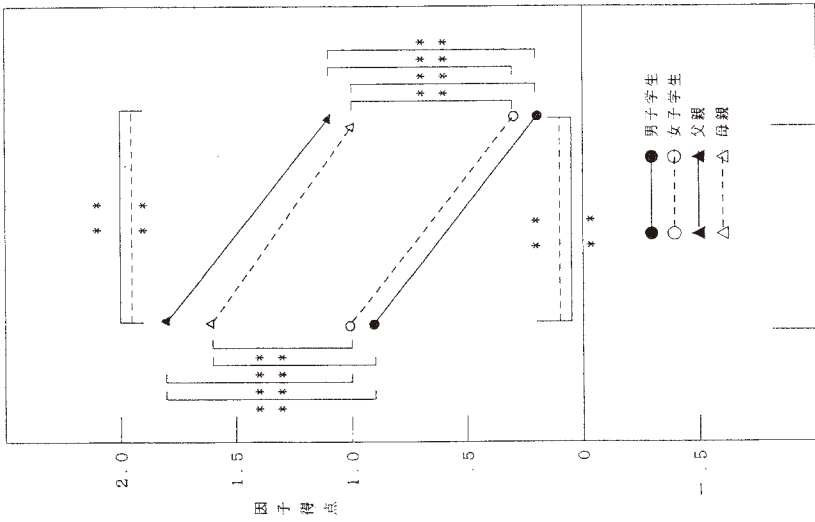
図2 時代と年齢間に交互作用がみられた場合の各群の評定得点の平均

ており、その傾向は中年期の父母間でも見られた。

2. 因子得点による比較

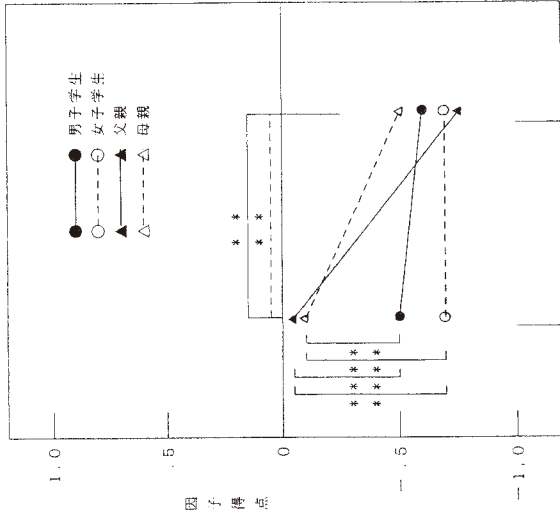
人生観の基本構造の側面から大学生と両親の人生観の比較をするために、全被験者において抽出された因子構造を基に、各評価得点にヴァリマックス回転後の因子負荷量を加重し、4因子全体で標準化した因子得点を算出した。各時代における各群の因子得点の平均を図3-1から図3-4に示した。

図3-1から図3-4より、各被験者群とも第I因子はプラスの数値を示しつつ大きく下降し、第II因子と第III因子はマイナスの数値を示し、第IV因子は、マイナスからプラスへと変化している。13種の生き方の潜在構造である4因子の様相から全体的特徴を見ると、各被験者群とも他者に共感し奉



62・63年度 93年度

図3-1 第I因子「慈愛奉仕」



62・63年度 93年度

図3-2 第II因子「内面生活」

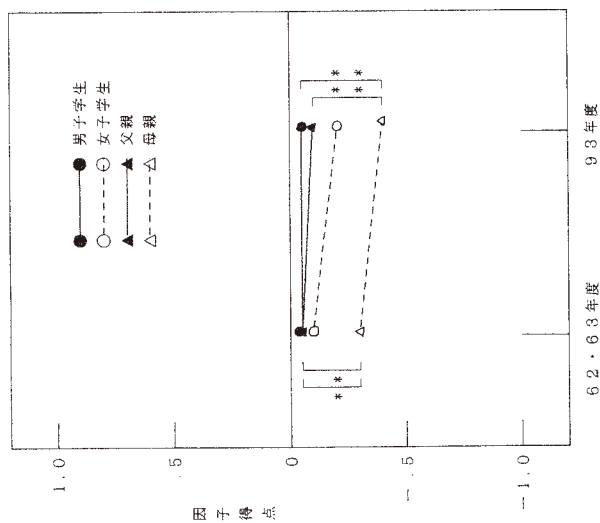


図3-3 第Ⅲ因子「積極行動」

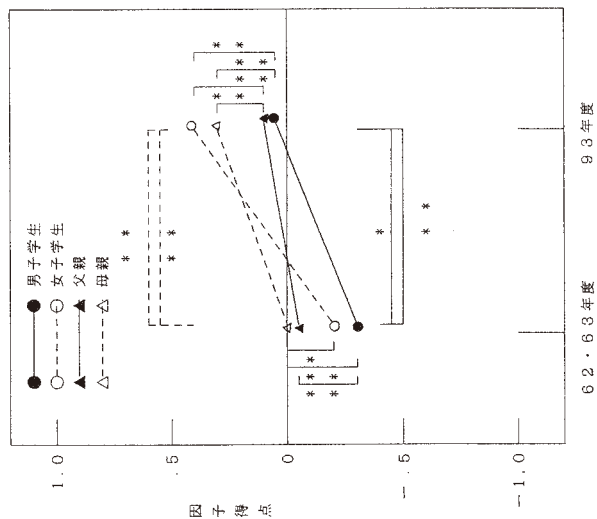


図3-4 第Ⅳ因子「安素多彩」

図3 62・63年度および93年度の男子学生、女子学生、父親、母親ならびに母親の因子得点の平均

62・63年度 93年度

仕することを好んでいるが、その時代差は大きい。また、内省的なものを重視することと社会を改革しようとする能動的傾向はあまり好んでいない。なにかに偏らず、様々なことを柔軟にやりこなし、安易で私生活優先を好む傾向は時代とともに好む方へと大きく変化している。

図3-1より、第I因子“慈愛奉仕型”では、62・63年度より93年度は、学生も両親も著しく減少しており、学生の落差は両親のそれよりかなり大きい。すなわち社会的経験を積んだ中年期の両親は青年期の学生よりも、両時代とも共感的で奉仕的ではあるが、しかし時代の推移と共に両者とも社会に関心を持たない自己中心主義へと変化している。わけても社会的変化に敏感な学生の減少は著しい。

図3-2より、第II因子“内面生活型”を学生は時代に関係なく嫌っているが、両親は93年度には学生と同じレベルになっている。すなわち30年前は中年期の両親は、現在より内省的だったと考えられる。

図3-3より、第III因子“積極行動型”では、各被験者群とも時代による変化はない。しかし両時代とも母親が、男子学生と父親よりかなり低い。母親が置かれている社会的立場、役割が、変革や支配をしようとする能動的なものをあまり必要としないことが、人生観に影響していると考えられる。

図3-4より、第IV因子“安楽多彩型”を30年前には学生が両親よりかなり嫌っていた。ところが93年度は各被験者群とも好ましい方に変化し、とりわけ女子学生は著しく増加しており、“慈愛奉仕型”より高くなっている。母親と男子学生の増加度はほぼ同じだが父親の増加度は少ない。従って93年度は母親と女子学生は高く、父親と男子学生は低いという様相になっている。すなわちこの因子においては30年前は年齢差、そして現在は性差が見られるのである。以上のことから考えられることは、高度経済成長期の60年代前半において、学生は理想に燃え、現在ほど多様性と安楽を求めてはいなかった。しかし、様々な経験を積んだ両親は社会に流動的に適応するため学生よりは好んでいた。そして経済的成長を遂げてきた現在では、特に女子学生と母親が、状況に応じて柔軟に生きることを好み、平穏で安楽な日々

を求めていると考えられる。

結 語

人生観の基本構造に関しては、因子構造の安定性、さらに Morris (1956b) の理論との対応関係から 4 因子構造の妥当性が確認された。

また、因子パターン類似性から、宗教倫理観と政治経済観はともに人生観の基本構造に基づいて考察することが妥当であると考えられた。

大学生ならびにその両親にみられる人生観の時代的变化について特記すべきことは次の通りである。他者への共感や自己抑制といった社会中心主義から、自己中心主義へと学生も両親も著しく変化している。そして両者とも、時と場合に即応する多元主義的生き方がますます優勢になっており、中でも女子学生と母親の評価は飛躍的に高くなっている。達観や瞑想といった内省的生き方に対して、学生は時代に関係なく低く評価しているが、93 年度の両親では学生と同じレベルに下がっている。内省的な次元では両親が学生の人生観に近づいてきたと考えられる。30 年前の青年期の学生は、強烈な刺激を好まず、平穏で安楽な生活を求める生き方をあまり好んでいなかったが、経済先進国となった現在の日本における学生は、中年期の両親と同じようにこのような人生観を好んでいる。私生活優先の生き方では学生の方が両親の人生観に近づいてきたと考えられる。しかし、伝統の保存と人類の叡智を尊ぶ生き方では、両時代とも学生と両親間で価値志向に大きな差が見られ、また、奉仕的な生き方と享樂的生き方では時代と共に差が大きくなっていることから、世代間に葛藤が生じ易い状況が本調査の結果からも推測できる。

参考文献

- 安藤延男 1974 大学生の価値観の継時的研究 日本教育心理学会第16回
発表論文集 242-243
- 原 一雄・大井直子・岡林秀樹 1991 大学生の価値観(1) 人生観・宗教
倫理観・政治経済観研究の一方法論 日本心理学会第55回大会発表論文
集 624
- 原 一雄・大井直子・岡林秀樹 1992 ICUにおける大学生の価値観研究
アジア文化研究 国際基督大学 別冊3 91-100
- Havighurst, R. J. 莊司雅子(訳) 1967 人間の発達課題と教育 牧書店
(Havighurst, R. J. 1953 *Human Development and Education* Longmas-
Green)
- 岩崎正子・石塚正一・原 一雄 1983 ICU在学生の人生観の調査研究
—20年前との比較— 教育研究 国際基督教大学 26 85-106
- Morris, C. 尾住秀雄、渡辺照宏(訳) 1966 人生の道 理想社 (Morris,
C. 1956a *Paths of Life* George Braziller)
- Morris, C. 1956b *Varieties of Human Values* Chicago Univ. Press
- Morris, C. & Small, L. 1971 Changes in Conceptions of the Good Life by
American College Students from 1950 to 1970 *Journal of Personality and
Social Psychology* Vol. 20 2 254-260
- NHK世論調査部 1984 中学生・高校生の意識 日本放送出版協会 61
- 岡林秀樹・原 一雄・大井直子 1991 大学生の価値観(2) 人生観の時代
の変遷 日本心理学会第55回大会発表論文集 625
- 岡林秀樹・大井直子・原 一雄 1992 大学生の価値観(4) 人生観の時代
の変遷(II) 日本心理学会第56回大会発表論文集 157
- 大井直子・原 一雄・岡林秀樹 1991 大学生の価値観(3) 人生観の縦断
的研究 日本心理学会第55回大会発表論文集 626
- 大井直子・岡林秀樹・原 一雄 1992 大学生の価値観(5) 人生観の縦断

的研究（Ⅱ） 日本心理学会第56回大会発表論文集 158

Troyer, M. E.・藤田恵璽・北山雅子・永野俱子・原 一雄 1963 大学生

の価値観に関する研究 教育心理学年報 3 9-10

山田順子 1988 青年期の母子関係 心理学評論 31 88-99

The Changes of Values in College Students and Their Parents (English Résumé)

Naoko Ooi
Hideki Okabayasi
Kazuo Hara

Study I

As the first in the series, present study attempted to examine the basic structure of values.

The subjects were approximately 3,000 students of ICU, 700 their parents and 90 alumni, who responded to 13 items of questionnaire, "Ways to Live" (Morris,1956). Approximately 1,900 subjects of them responded to three inventories of values were: Ways to Live, Inventory of Religious and Ethical Ways (9 items) and Inventory of Economic and Political Ways (6 items).

Principle component analysis and varimax rotation were performed on ratings of 13 ways of all subjects, and extracted four factors, named "I. sympathy & service", "II. introspective life", "III. active action", and "IV. comfort & variousness" respectively. To investigate the underlying value structure among different values, factor analysis was also performed on the ratings of the 28 ways of above mentioned three inventories, and four factors extracted here of were not only consistent with the former four factors, but also found in all subject groups in each period.

Study II

The second survey was conducted to compare the changes in the view between life of college students and their parents in 1962-63 and in 1993.

The data used here were collected from 1962-63 freshman (225 males, 202 females), their parents (137 fathers, 153 mothers), 1993 freshman (111 males, 194 females), and their parents (212 fathers, 241 mothers).

To compare the above six groups, both rating scores and factor scores of "Ways to Live" were employed.

The results obtained from the analysis of variance revealed that there were certain trends such as the increases in ratings of L7 (variety), L8 (comfort) and L12 (active action), the decrease in L1 (preserved the best), L2 (farsighted view), L3 (sympathy), L5 (group participation), L6 (effort), L10 (self-control), L11 (meditation) and L13 (service).

The significant differences found between the students and their parents in L1 and L4 (enjoyment), manifested psychological conflicts between two generations.

Further analysis was made by the comparison of four factor scores as follows. The first factor decreased and the fourth factor increased in 1993.

The students decreased their preferences for the first factor more than their parents. The parents placed much higher value on the second factor than did the students in 1962-63, but the parents' value preferences were not different from students' in 1993, while only mothers placed lower value than did the other on the third factor. The students and the mothers markedly increased but the fathers gradually increased on the fourth factor.

These trends are consistent with the data on Japanese students of other universities reported by Ando (1974) and on our ICU students reported by Iwasaki, et al. (1983). The present results suggest that the change we

observed here from “social-centered value” to “self-centered value” seems to be not only the characteristic of our ICU students but also the general trend of common values among Japanese in recent years.